

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第849号 平成26年12月11日

道徳の教え方？（2）

道徳教育の目標は、学校の教育活動全体を通じて、道徳性を養う事にあります。
この道徳性とは、

- 善を行うことを喜び、悪を憎む感情
- 人間としてよりよい生き方を志向する感情
- それぞれの場面において善悪を判断する能力
- 人間としてどのように対処することが望まれるか判断する力
- 道徳的価値を実現しようとする意志の働き
- 道徳的行為への身構え

をいい、何時でも人として望ましい、良い行為が出来る内面の資質を指しています。

従って、道徳の授業では、そうした道徳性を養う観点から、子ども達の発達段階に
応じ、一人ひとり子ども達の心の琴線に触れる授業をしていく必要がある
のであり、その意味で、投書に登場する教師には道徳教育に対する理解が十分
であるとは思えません。

投書の中にあつた指導教材の「売れないマジシャンが大きな仕事を断り、先に約束
をしていた子どもにマジックを見せに行く」という物語についていえば、「あなた
なら仕事と子どものどちらを選択するか」という事は問題の核心ではなく、むしろ
「どうして、そのような選択をしたのか」が重要なテーマでなければならないはず
です。

それは、いずれの選択も当然あり得るという事でもありますが、如何なる選択を
するかという事は、人としての生き方を自らに問い直し、どう行動すべきかを考える
事と直結しているからです。

この題材に関していえば、

- 生活を支えるためには、仕事をしてお金を稼ぐ必要がある
- 子どもとの約束は大事で、その約束を反故にしたら子どもは哀しい思いをするに
違いない
- やっと見つかった仕事を断ったら、もう2度とチャンスは無いかも知れない
- お金も大事だけれど、お金に代えられない大切なものがあるのではないかと
- どんなに大事な約束でも、守れない場合があるかも知れない、その場合にはどう
行動したら良いのだろう

等々、考えるべき事は沢山あるはずです。

子ども達は、与えられた題材に対して、自分ならどうするだろう。仕事を選ぶのか、それとも子どもとの約束を果たすべきなのか、心は揺れ動くはずですが、いろいろ考えた上で、自分としてはこちらを選択する、そうした思考のプロセスこそ道徳性を養う上で重要なのであり、算数のように答えを導き出すものではありません。

道徳教育については、小中学校の「道徳の時間」を、数値評価を伴わない「特別の教科」に格上げし、2015年度（平成27年度）から先行実施される見通しです。

道徳の教科化に対しては、依然として「価値観の押しつけ」につながる等の批判がありますが、道徳教育はこれまでも一貫して「生命を大切に作る心や他者を思いやる心、善悪の判断等の規範意識、主体的に社会参画する意欲や態度等を身に付けさせる」事を目指して行われて来たものであり、それは教科化によっても何ら変わるものではありません。

むしろ道徳教育に関しては、いままで、先程の投書を見ても分かるように、教師間の力量に差があり、また学校での取り組みにもばらつきがあり、形骸化しているとの指摘がありましたので、道徳の教科化は、各学校における道徳教育の充実と教師の指導力の向上、更には指導教材の工夫改善につながるものと期待しています。

特に、教師の皆さんには、道徳の教科化によって教師の指導力がこれまで以上に問われる事になりますので、道徳教育の重要性を良く認識し、指導内容や教材の工夫に積極的に取り組む等指導力の向上に努めていただきたいと思います。

なお、文部科学省では、「心のノート」を全面改訂した「私たちの道徳」を平成26年度から使用できるよう、全国の小・中学校に配布することとしています。また併せて、『私たちの道徳』活用のための指導資料の小学校編、中学校編がそれぞれ文部科学省のホームページで公開されていますので、こうした資料も有効活用されるようお勧めします。（塾頭：吉田 洋一）